

66 18～19世紀フランスにおける「病院医学」について

小林 晶

福岡整形外科病院顧問

近代の我が国における医学の大きな変革の一つは、明治政府の西欧医学の正式採用であることは言えぬ。1869年（明治2年）ドイツ医学が採用されて以来、医学教育は第二次大戦終了までは完全にドイツ方式であった。医学部卒業が1956年（昭和31年）の演者にとって、学生時代アメリカ医学の知識の流入はあっても、未だ従来の教育方式あるいはドイツ語が術語として遺残していたのが実情であった。演者は最初1961年から度々フランスに留学し、それまでの我が国で受けた経験とは異なり、予期しなかった数々の現場を観察する機会に恵まれた。少なくとも臨床教育においては、中世の旧態を脱したフランス医学の変革の姿が、依然として独自の伝統として遺っているのを目の当たりにした。

1789年のフランス革命はドラスティックな社会的な変革のみならず、医学教育および医療制度にも大きな変化をもたらした。E.H. Ackerknechtのいう「病院医学」の開始である。改革の中心となったのはA.F. Fourcroyで、1794年国民公会に改革案を提出した。その新しい教育の基本概念は「手先の技術と理論的教訓は統一すべきで、少なく読み、多く見て、多く実行する」ことであった。多数の患者に接し観察することが医学の中心であると主張した。具体的には、新医学校の創設、若手の教授陣の編成、従来の理髪外科医の刷新による外科と内科を同等に並列し、臨床教育と同時に病理解剖学、統計学に力点を置いた。病院組織にも根本的な改革、改組、拡張が加えられた。実践的教育、すなわち臨床の実地教育を多く行うことが重要で、学生は初日から病室で教育され理論教育からは入らなかった。病院はあらゆる医学思想の土俵であり、すべてそこで適用され確認される。解剖学でも臨床への裏付けだとの考えが満ちていた。有名な coup d'oeil（一瞥、素早い観察眼）が中心といえる。

1802年ナポレオンが創設した病院制度の中には、現在も残っている *internat*（アンテルヌ制度）があり、各段階のコンクール制度は医師養成の基本を構成している。病院における地位は学部のそれより優位にあり、且つ憧れの的であった。「病気を見ずして病人を診よ！」と言った Pinel の言葉に象徴されている。この時代には後世に名を遺す多くの医師が育つ。すなわち Bichat, Pinel, Corvisart, Desault, Dupuytren, Louis, Laënnec, Broussais など枚挙にいとまがない。

この時期にはヨーロッパ全体はもとより新興国アメリカからも留学生が集まり、パリは世界の医師教育の中心的存在であった。現在のアメリカの *residency system* の淵源もここにある。演者の専門である整形外科も啓蒙主義が勃興した時期に合致してフランスを起源としている。理髪外科医であった A. Paré は中世末期の卓越した外科医であった。そこから飛躍脱皮した臨床外科・整形外科学では G. Dupuytren らが新しく勇敢に疾患治療に挑んで開発努力し、死亡例を必ず病理解剖し病因の探求をして、以後の発展に寄与することが大きかった。さらに革命からナポレオン戦争における軍陣外科の進歩が加味され外傷外科の基本となった。

病院医学は1848年の二月革命まで持続したが、相次ぐ政変やドイツで開花した「研究室医学」の影響があり、例えば基礎医学や顕微鏡教育などを軽視したことで徐々に袋小路に迷入し始めた。情熱的な集中と信念からの科学性の少ない欠点が認識され、局所的視野の観察と統計学だけでは産業革命の発展と相俟って、時代に即応できない疑問が生じてきたのである。このようにして、19世紀後半には C. Bernard, L. Pasteur の登場となり、新しいフランス医学の再編が行われてゆくことになる。しかし、臨床訓練にとって「病院医学」の基本理念は看過できない長所をもっているのは確かである。演者は現場で「病院医学」の臨床面における名残を見るにつけ、明治の西欧医学の採用に当たって、この伝統を持ったフランス医学が部分的にでも採用されていたら、と考える。